

小編集

すべて星のかけら

⋮

かくらこう

⋮

もくじ

⋮

すべて星のかげら

⋮
3

王様と番人

⋮
15

長月日記

⋮
19

「ミドリコ、」

⋮
45

角砂糖

⋮
65

うろおぼえのおぼえがき

⋮
92

⋮

すべて星のかけら

⋮

一. 誘拐犯

晩夏にくすぶる火を風がさらう瞬間に居あわせ、まいあがった熱い砂で左目をやけどした。

門のまえ、焼け残ったひまわりがあしもとの蟻の列をみつめてる。わたしも蟻を右目でみて、指さきで行進をじゃまする。膝について、だらんとうつむくひまわりの顔をあおぐ。顔にはたくさんのいのちがつまってる。たくさんの子がつまってる。ひまわりの顔を落とさないように、そっと、いのちをひとつ抜き取り、眼帯のうちがわに隠す。先生が医院の玄関から出ていらして、「なにしてたの？」わたしを立たせ、膝こぞうの土を、蒸栗色のハンカチでやさしく払ってください。「誘拐してました。洗ってお返しします」先生の手にあるハンカチを奪い、すばやく制服のポケットに入れる。困ったような、呆れたような、半々の眉毛で、ことばに詰まって、でも、伏せた目に腕時計が映るとすぐに、先生は車へと足を向けてしまう。「先生、わたし、誘拐した子を包んで、ハンカチをお返ししますね」スカートのしわを伸ばし、助手席のシートベルトをロックする。先生はハンドルを回しながら、わたしを見もしないで「つぎの授業には間に合う？」と善良なことを言った。

二. 写真家

枯れたひまわりをカメラにおさめ、彼は咳きこみながらまた歩き始める。数年前に彼は男性の横顔だけをおさめた写真集をつくった。こうべを垂れたひまわりが、その写真集に封じた誰かを思い出させた。ひまわりは朽ちるのを待つのか、はたまた次なる再生を待つのか。彼は思う。しばらくコーヒーを飲んでいない。アラームどおりに目覚め、適切なカロリーと栄養素を摂り、医者と言いつけに従い、身体を分析され、薬を流しこまれる。そんな労り深い牢獄の暮らしを健気に守りつづけてとれくらい経っただろう。はげしい咳に押し出された痰は鉄の味がする。ペーパーに吐いたその色を確認する気にはなれない。善良な行動にうんざりしている。煙草を一ダースも同時に吸い、ジャンクフードを喉に詰めて窒息したい。やさしげなパッケージをまとった窮屈な制限に飽きた。どす黒いコーヒーで残りの時間を塗りつぶしてしまいたい。でたためにシャッターを切る。彼は思った。こうべを垂れたひまわりに太陽を見せる方法はあるだろうか。

III. Tele Vision

古いテレビが届いた。送り主は、死んだはずの写真家。

昔、出版された彼の写真集には僕の横顔も載っていた。

初雪のちらついた午後、僕たちはみんな作業をなげて屋上へ上った。

画面を見すぎて目も首も肩も頭もいかれていた。

インスタントコーヒーで身体の内側は染色されていた。

豆を炒りたいな。豆になろうか。

誰かが音楽をかけた。

屋上から眺めればちよつと空は広くなったが、ビルばかりの並ぶくすんだ灰色に変わりはなかった。

故郷には牛しかいなかった。人間はいなかったんだよ。

隣の女へ話しかけた。

あなたも草ばかり食べていたのでしょ、だからそんなに細いのね。

笑う彼女の大きな口はライオンだった。

唐突に土が恋しくなった。

土の上には空があった。

空から粉雪がゆっくりと落ちてきた。

頬へ触れて溶けた。

……冷たい。

シャッターをきる音が響いた。

あの瞬間が僕らの出会いで、写真集の出版はゆるやかな別れの始まりだった。感情がすっかりやわらかい霧に変わった頃、彼は世界から消えてしまった。このブラウン管テレビを彼がどうして送ってきたのだから知れない。

考えるなよ、ボタンを押してみな。と、彼は笑うだろう。そういうひとだった。

コンセントを差して、電源をいれる。

砂嵐。

吹き荒れるノイズの奥で、フラッシュが光ったような気がした。

四．砂嵐テレビ

砂嵐を横切り、彼は古い車を走らせる。ここは壊れたブラウン管テレビのなか。画も音も吹きすさぶ嵐にちぎれて乾ききっている。ときたま彼の頬をなにかの断片がかすめ過ぎ去る。それはロマンを亡くした卑猥。それは

形だけが残った言葉。それは美そのもの。ゴーグルの奥の目から水が、ひとつぶ。目的地があるとしたら、モノクロのオアシス。椰子の木には幼い日々の記憶が実っているだろう。時間を逆走して還る彼の喉を潤すために。

五. あね

外国製の古い車で姉さんが来た。寝癖を直す時間もくれずに僕を連れ出す。いつもとおりの勝手なふるまい。寝ている恋人の前髪を断りなく切るようなひとだ。それでケンカにならないのだから呆れる。この外国製の車の持ち主は、眉毛のずっと上まで髪の短くなった顔が鏡に映っても、「ああ」と声をもらしたただけだったらしい。善良なひとだと思う。

「どこに行くの？」

「神さまに会いに。あなた、また面接でしょう？ 神さまにお願いしておくといい」

いやに輪郭のはっきりとした雨の降る神社にひとはまばらで、休日なのにとても静かだった。手を合わせ目を伏せれば、屋根を打ち葉から落ちる雫のひとつひとつが消えゆく瞬間さえくっきりとしている。僕だけにお参りさせて、姉さんは社務所でお守りを選び、早々に踵を返していた。お願いも買物感覚なのだから神さまも呆れ

ているかもしれない。僕は僕でゆっくりと秋めく木々を眺めながら鳥居をくぐる。てらてらと雨に光る鳥居の赤、姉さんを隠す赤い傘。とがったヒールが滑りもせず上手にもみじを踏んでゆく。雨に冷やされ、裸になりつつある枝の潔いうつくしさに僕は釘付けになる。気づくと、姉さんが傘を傾けて僕を見ていた。そして、

「きれいだね？」

「……きれいだね」

「枯れていく色をきれいだななんて残酷だね」

同意を求められたのだと思つて応えたのに、すぐさまびしゃりとはね返されて、僕の喉から「ああ」と声が出なくもれる。すると、姉さんはなぜか一等やさしく笑つてお守りを寄こした。交通安全祈願だった。

「あなたは残酷な子だね」

再び傘に隠れて、姉さんは石段をおりはじめた。ひるがえったスカートのゆらめきが幼い日々の時間を連れてくるような気がした。こんがりとした焼き菓子みたくだった肌は、白くやわらかな砂糖菓子に変わって、その足首が雨に濡れている。ヒールなんて履いていても濡れた石畳のもみじを踏んで転ぶような危なげなひとじゃない。でもきつとあの車の持ち主なら転ばないようにと姉さんの手を取るのだろう。お守りごと両手で傘の柄をにぎり、僕はもみじに同情する。雨に冷たく落とされた上、ヒールに踏みにじられるもみじに親近感を抱く。拾つて窓辺に並べて乾かして、マッチを擦つて燃やしてあげたい。みんな燃やしてしまいたい。

六、おとうと

雪に足あとをつけて遊んでいたあなたが、急に暗い影に隠されて見えなくなりました。不安になって影のなかに飛びこむと、あなたはただ無邪気にあたしへ抱きついてきた。その手のちいさなことを。

「空を見て。大きな鳥。あの鳥は南の国に姉さんの嫌いな冬を運んでいってくれるんだよ」

そう言われて上を見ると、頭のふたつもある恐ろしげな鳥のまっくらなおなか、ゆっくり、ゆっくりと、動いてゆくところ。うんと大きく広げた翼から、火の粉がちかちかと落ちてくる。ほんとうは、赤子をさらうような、火を吐くような、ばけものかもしれない。でも、あなたが言うのなら、きっと良い鳥なのでしょう。

すっかり日差しが戻っても、火薬のにおいはとことなく残り、あたしはあなたが遠くへ走っていけないようにずっとずっと抱きしめ、雪の冷たさに赤くなる、その耳たぶをかわいそうに思った。

七、木蓮

つめたい夜のつむじ風にゆれる枝、小さく芽がふくらんでいる。

「あのなかにはね、とても小さな人が眠っているんだ。花が開くまで眠っている。産毛のようなランプのようなあのベッドで、雪も風もやり過ぎすんだよ」

八・秘密のねつ

ほたほたと雪が落ちるなか、秘密を盗まれた少女がいる。

彼女は蒸栗色のハンカチをただにぎりしめ、涙が頬を流れるまま歩いたので、涙にふれた雪が秘密を読みとってしまったのだ。

あついよ、と雪は思った。これでもしかしたら夏のアツさなのかもしれないよ。

ほとん、と。地上に降りるや、雪はまわりの雪たちに秘密についてねつっぽく語った。雪は少女の秘密ごと土へ沁みこみ、眠る植物に吸収された。

やがて開く草花が詩情を口々に歌うとき、そのうつくしい香りが自分の秘密から生まれたなんて、少女はゆめにも思わないだろう。

九、ひまな店

靴の裏へこびりついた泥が重いと彼は思った。そして頭に残るゆうべの夢も重いと。憂鬱は指折り数える類のものではなく、どこまでもつきまとう影か、ねっとりとした泥である。カフェへ沈み、吐き気をもよおすだけと予感しながらコーヒーを注文する。ひまな店だな、と彼は思った。客はほかにいないように見えた。テーブルに鳥の羽根が一枚落ちていた。彼は羽根を折って床へ捨てた。眼鏡をはずして眉間を指圧しているあいだに、グラスが届いていた。初めは空だった底から、なにやらつきつきと様々な緑色のかたまりが、もこりもこりと沸き起こり、あつという間にグラスのふちまで成長した。ちいさな森である。まるまると、じつにおいしそうな、生まれたての森である。たまらず喉を鳴らして立ちあがると、とたんに彼は鷲に変わって、グラスの森へ飛びこんでいった。

カフェの店主がやってきてグラスをキッチンへ回収した。森をまるごとミキサーにあけて、ミルクとハチミツを加え、スイッチをいれる。あざやかな手つきで新しいグラスに注ぎ、アイスとクリームをのせてスパイスを振るい、ストローをひとさし。店の奥の暗がり文庫本をめくっていた客へと届ける。

「たいへんお待たせしました、春待ち気分のグリーンシェイクです」

十、星のかけら

先生はたいへん愉快なはなしを信じている。

星の爆発によって生まれたのが元素なのであって、つまりわたしたちはすべて星のかけらなのだ。

わたしは地球のかけら。

ひまわりの子も地球のかけら。古書店で先生が選んだ写真集も地球のかけら。光線銃を構えるように視線を投げ合っていたあの人たちも、まっしろな雪にうっすらと残る足跡も、あざやかなグリーンシェイクも、みんな地球のかけら。言葉が通じるとか肌の色が違うとか爬虫類とか甲殻類とか哺乳類とか鳥類とかそんなのも関係ない。信号機も橋もトンビも羊雲も。わたしが座るこの古びたシート、国道を海へと走るカブトムシみたいな車から、望遠鏡でも探せない遠くの遠くで回る星まで、ひとつながりだと信じている。まるで神さまを慕うように。

「古い約束みたいで、目がくらむでしょう？」

と、仰る先生の、ほれぼれする喉仏も、ハンドルを握る骨ばった手も、その薬指の指輪も、わたしが小箱に隠した蒸栗色のハンカチも、この胸にささる棘も。

わたしたちはすべて星のかけら。

⋮

王様と番人

⋮

お城のドアに百人の番人。
するどい槍突きダレゾと問う。

アンドロメダもよりの宇宙的大広間にちいさな王様。

ちよっと野原へお散歩ゆきたくて、王様のやとった百人の番人に外出の許しを乞う。

じゅんぐり、じゅんぐりドアをくぐる。

九十九人目がウムとうなずいた頃には、空は星の水玉。

外出には遅すぎますな。

百人目に押し戻された。

王様しょんぼり、またあした。

月もねむかけする時間、なりひびく空腹のメロディ。

王様、プディングを食べたくなって、蔦のからまる天蓋つきベッドからよちよち抜け出した。

キッチンへたどり着くまでには百人の番人。

食べたら歯を磨くのですぞ。

あしたの運動になわとびも追加ですぞ。

朝ごはんには起きると約束できますかな。

ようやくと王様がキッチンのドアを開けたら、お妃様がすっかりプディングをたいらげたところ。
いとうまし。

王様しょんぼり、またあした。

王様めざめて部屋から出ると、床に置かれた百個のあめだま。

だれかからのプレゼント。

ポケットふくふくふくらませ、王様ごきげん、スキップさ。

⋮

長月日記

⋮

〔九月一日 晴曇雨〕

父ののこした包丁もらった

かばんへかくして 警官のまえをあるく

なるべく猫背をしゃんとして

「うたがわしくはありません」

父は包丁で（さかなの）はらをきった

父は包丁を（テーブルへ）たたきつけた

「一一〇番 いつよぶべきか」

わたし（さんまを）なんとか さばいたかしら

父の包丁には ほこりがうっすら

「たにんごとではないのですよ」

なるべく猫背をしゃんとして

かばんへ包丁かくしてあるく

〔九月二日 晴 夏戻る〕

二〇二号室の女は包丁で海の膜を剥ぎとり母への土産にした

二〇三号室の女は包丁で夏を刻んで炒め夕食にした

二〇四号室の女は包丁を研いで旅人を待つ

〔九月三日 晴〕

ゆびきりげんまん うそついたら包丁千本のます ゆびきった

だれとあそんでいるのしょう

ゆびきりげんまん やくそくを

してはならない そのあいて

うそついたら包丁千本のます

さあ ゆびきった

「九月四日 晴のち曇」

魚をさばくのを じっと見つめる人魚がいる

珊瑚をたたき割り じっと見つめる人魚がいる

その目

その目が包丁みたいに僕を切る

「九月五日 晴」

猫背先生と双眼鏡で人魚を観察していました。

人魚は包丁でみずからの胸を裂き、記憶のかたまりを切り抜き、砂浜を掘り、それを埋めました。

人魚が海へ帰ったあと、私と猫背先生は砂浜を掘りました。記憶のかたまりは人魚の血液でぬれています。

「これは妬みや憎しみの類の記憶でしょうか、先生」

「さあ、どうかな。きみも持ってください」

猫背先生は私へ記憶のかたまりを寄こしました。両手で受けたそれは、まだあたたかく、脈打っていました。きらきらとガラス片のようにかがやく人魚の血液が、私の指の間を通り抜けて落ちてゆきます。それはとてもうつくしく。

「さて。ではこれを教室へ持って帰ろう。どういふ類の記憶なのか、調べてみよう」

猫背先生は記憶のかたまりを丁寧にガーゼへくるみ、保管容器にしまいました。

学校まで、私はその容器を持たせてもらいました。人魚はどうしてそれを埋めたのでしょうか。記憶を取り出した空洞に、新しいなにかがまた詰まってゆくのでしょうか。それとも、いつまでもまっくらなまま、からっぽな胸を感じつづけるのでしょうか。

波間に顔を出して陸を振り返る人魚を想像したとき、私の胸に海がこみあげるのです。

〔九月六日 天気雨〕

青空を包丁でめった刺しにしたら雨になりました。

〔九月七日 雨〕

囚えた雨のはなしを よくよく聞き 手紙に記した

夜になり さらに雨 雨 雨 雨

封筒のなかでも 雨が声をあげつづけ 雨 雨 雨 と

のりがうるけて 封がとけ

わたしの部屋も 雨 雨 雨

猫をこわきに抱えて 雨 雨 雨

〔九月八日 雨〕

紙でつくった灯台に少年がマッチを近づける。

……これは、のろしです。ハリボテの月から、宇宙船をおろしてください……

しかし海原が母親の顔に変わり、うふふと笑いながら、燃える火ごと灯台を飲みこんだ。

「九月九日 風鳴る」

少年は鏡を包丁で割りました。いやだったのです。鏡はとてもきれいに彼を映したので。まっすぐに彼を見たので。彼はいたたまれなくなって鏡を割りました。鏡のなかは影の世界。影はいつでもひとへ張りついて、自由な本物の世界へ憧れているのです。彼はそんな影の視線に耐えられなかったのです。

粉々に砕けた鏡をひろい集めるひとがいました。それはそれは不思議なおおきくひろいかたです。そのひとは腰を折らずに立ったまま、月もつかめるおおきな手のひらへ破片を吸い寄せました。そのひとは割れた鏡をさらに細かく砕いて砂糖水と混ぜ、きらんきらんと光るサイダーに変えてしまいました。そして、すてきな壺にいれて蓋をしました。

真夜中、のどの乾きに目覚めた少年は枕元に置かれていたすてきな壺に気づきました。蓋を開けると、甘い香りがぷちぷちと弾けました。たまたらず、一気に飲みほしました。するとどうしてでしょう。涙がとまりません。きらきら、きらきらとのどを落ちるサイダーは少年の影のすべて。本物の世界に憧れる影のすべて。きらきら、きらきら。青暗い夜が光ります。もう元へはもとれません。光る影を飲みこんだ少年は、もはや偽ることができません。内から外から光る目がなにもかもを見ているのです。

月をもつかめるそのひとは、なりゆきをじっと見つめています。

〔九月十日 雨〕

今宵もブリキのらくだのぜんまいを巻く。
砂漠の旅を夢にみる。

〔九月十一日 警報のち晴〕

らくだのこぶには野望をつめる
ぼくの耳たぶにも野望をつめる
きみの頭蓋骨にも野望をつめる
いつかみんな包丁でたたき割る

「九月十二日 晴」

よくよく冷やした夜の蜜

旅人さんの喉に

じょうろで流してあげよか どうしよか

夜の蜜は影の蜜

飲めばたちまち黒い影

わたしは鬼女の召使い

鬼女はふとんでしずしず ぐうすかびいび

恋人の黒髪でしぼりあげられた旅人さん

叫びすぎて喉から血が出てしまったね

……鬼女のふっくらした歌声に惑わされた旅人を……

おそろいの指輪に祈りをささげた砂糖菓子みたいな夜

その翌朝 みつあみを包丁で切り落とされたね

それがわたし 鬼女の足へすがる召使い

わたしのあるじは枕へよだれをたらして

おいしい朝食を夢にみる

夜の蜜は影の蜜

飲めばたちまち黒い影

でも ねえ 旅人さん

……恋人をうらざり黒髪を切り落とした旅人を……

黒髪ほどけたからっぽの土間で

あるじが起きればきつと折檻

わたしは鬼女の召使い

あなたの恋人と同じ 裏切られた娘

ねえ旅人さん

……つぶしてしまおか
にがしてあげよか……

〔九月十三日 晴曇〕

犀くつろぐ中庭へ投げこまれた封書を開き驚愕の午下がり。

「昨年埋めました歯でございますが、順調に芽吹き茂りまして、そろそろ実もつき始めました。犀様にわけていただいた歯のおかげでございます。収穫を楽しみにお待ち下さいませ」

歯列の隙間を舌でたどり思い出すのは、昨年包丁をつきつけた犀に反撃され折れた歯のこと。

そういえば、何倍にもして返してやろうと犀は言っていた。

手紙を見せると、犀は億劫そうに閉眼した。

〔九月十四日 晴〕

蟻を誘拐した罪にてAは懲戒免職

包丁を隠蔽した罪にて私は禁固一年

hutariで花を捕獲に行ったのです

コスモスの首をざぼりざぼりと落としたのです

「たれがふたりを罰したのか？」

虫の声うわさする刑罰の夜です

〔九月十五日 晴〕

月の石を盗んだ男が逃げています。どうやって盗んだのかって、それはもちろん梯子をかけて、月へのぼりまして、ひらべったい月へ包丁をつきたてまして、がつんがつんと月面を削って、石にして落としました。包丁の刃も欠けまして、きらきら、ぱらぱら、落ちてゆきました。それが先日の光る雨の理由です。

以来、月に追いかけると思いこんで、石を抱えて逃げる男なのです。

でも、お月さんにしてみたら、ちょっとクレーターが増えただけのこと。気にしちやいません。それよりも、こぼれた刃の雨が刺さった女の子の、まっしろい肌の傷が一大事。

月からことのしだいを聞かされて怒りにふるえるのは、女の子を守れなかった水玉もようの傘でした。

それから、刃の雨を降らせた男を探して、今日もまた、ぐるんぐると頭をふりまわし、傘が飛んでいます。晴れた町を。

〔九月十六日〕

ちいさな王様からの命令は、雲らしくない雲を探すこと。

お絵描き帖を小脇にかかえて塀から塀へ。

おともは猫です。

〔九月十七日〕

ここだけの話。

あなたの背中の中の骨のごつごつにはちいさな駱駝が住んでいて、その駱駝のコブには、流しそびれたあなたの涙がたまっています。

駱駝はいつでもあなたへ涙を還してくれます。

だれかへ教えるときには、そっと耳打ちで。ここだけの話なので。

〔九月十八日 雨〕

封印でも解くようにあなたは肩を回す。首を回す。足を伸ばす。

そんなふうにしてどこへ飛び立とうというのか、こんな雨の夜に。

〔九月十九日 晴〕

傘の骨を折るようになんたは肩を折る。首を折る。足を折る。

そんなふうにしてどこへ収まろうというのか、こんな晴れの日。

〔九月二十日 曇〕

はちみつとバターの海で溺れてきた。

ちよつと夢のなかでね。

ご想像通りの甘たるいべたつきは、コーヒートのシャワーで洗い流せば大丈夫。すっきり目覚めたら、クロワッサン型の車で出かけよう。

〔九月二十一日 晴〕

きみにやすんでほしいんだって

むかしなじみの椅子が

きみを追いかけて 見失い

ぼくぼくと雲の浮かんだ草はらで

途方に暮れている

だから

かわりに僕が座って

きみに電話をかけているんだよ

〔九月二十二日 晴〕

背中にはいたはずの駱駝なのですが、今朝気づいたらいなくなっていました。

「大きくなりすぎたコブには　これ以上涙を貯められないのです」

私の指へ刻まれた書き置き。

それじゃあ、私が今まで流しそびれたあの涙を背に、駱駝はどこをさまよっているというのでしょうか。たふりたふりと涙を運び、どこへ向かっているのでしょうか。

駱駝をなくした私はもう涙を止めるすべはなく、駱駝を思っ泣きっぱなしです。

やっぱり私、この夜、出かけます。

駱駝を探しに行ってきます。

「九月二十三日　晴」

果実をもぐように

かわいた靴下を

かごへおさめていた

しみとしわの　ぶあつい手

くいこんだ金色の指輪

たっぷりとした

お日さまのにおい

壇のふたを開ける音

かかとの下の床のきしみ

見えない足跡をなぞって暮らす

ささやかな音に胸を焦がして暮らす

背骨をひとつずつ積みあげて暮らす

きょう

〔九月二十四日 曇〕

わたしの背にいきものが隠れている

いきものは歌っている

ずいぶんご機嫌な調子なので

わたしはタンバリンを振って階段をのぼる

タンバリンを振ると 歌も大きくなる

わたしは屋上へ飛び出し タンバリンを激しく振り回す

いきものが歌い

わたしが跳ね

タンバリンも柵を越え

くもりの街が

あっ、

と 息をのむ

つづきは、そのお手で本のページをめくってお楽しみください。

おはなしの喫茶室の本 …… 製本直送.comにてお求めいただけます

◎おはなし手帖

奇妙で不思議な幻の小片標本。二〇一一年から二〇一九年までにTwitter @ohanasitechoに綴った約八百作品のなかから約二百作品を選び、「夜を歩く君へ」「月と砂漠へ魚がれる」「そのとき海の音を聴いた」「猫偏愛の」「地図のない町を歩く」「その国へ渡る切符を持っている」「青に捧ぐこと」の七章に収録。新書判・一三二頁。

◎アカパナの手紙

とあるおいしいパン屋の父娘はとっちもとっても頑固者。大げんかしたふたり。船に乗りこんだ娘は言葉もわからない遠い大陸へ。父は娘のためにあやしい奴とへんてこな契約を交わして遠くの山を目指す。残された家族に時々届く父からの手紙。便りが途絶えてしばらく経ったところ、遠い街から手紙が届いて……。はなればなれの家族の行く末は、空の星が知っている。文庫判・七二頁。

◎緑街

ひとが植物になる研究都市（緑街）に双子のきょうだいに騙されてやって来たキイ。いつ植物になってもかまわない。投げやりに無関心にベッドでその日を待つ……そんなキイを捨て置けない研究員ウキシマによって、キイは引き取られる。キイが緑街で唯一心を寄せた存在・フウコが梅の木になり、フウコの足跡を通して、キイと緑街の住人との交流が始まる。さみしさとさみしさが呼び合う物語。文庫判・一七〇頁。

夜の底にたゆたう
いびつな瞬きを
すくいあげ
本の姿に



小編集・すべて星のかけら

2023年2月22日

著者 | かくら こう

発行 | おはなしの喫茶室

印刷・製本 | 製本直送 .com

©2023 Kakura Kou

<https://www.kakura-ohanasicafe.com>



著作権法の例外を除いて本の一部または全文を複製する一切の行為を禁じます